

琉球古典音楽 声楽譜の読み方

世礼国男先生が声楽譜を創案なされた頃は、琉球古典音楽の音組織について未だよく分かっていない時代でありました。

世礼先生亡きあと研究が進みました。結果、今日の学識に照らして世礼声楽譜を見た時、伝承されてきた唱法を正しく記述出来ていません。世礼先生の時代に解明出来ていなかった部分は現在の私達が世礼声楽譜を補完しなければなりません。

世礼声楽譜は、とりわけ音階レニ線譜乙の扱いに多くの問題があり、琉球音階から外れた記述が目立ちます。

要点は、琉球古典音楽は①五音階で唄う・②唄音率の歌である。が、世礼声楽譜ではそれが理解されていません。ここで云う五音階とは、宮・商・角・徴・羽ですが、この五音階は中国、朝鮮、日本の音階の基本となるものだと云われています。それは三分損益法から導かれた音階ですが煩雑になるのでここでの説明は省かせていただきます。

宮・商・角・徴・羽は、音階ド・ミ・ファ上・尺に相当すると理解して下さい。

唄音率とは、四度隔てたドとファの間に一つの中間音が入り、その中間音は浮動する。

この三音が音階の一単位として上下に連なり旋律は進むと説明されます。従って、「オクターブの中には、下部にド・ミ・ファ、上部にソ・シ・ドと同型の「二全音＋半音型」の二つの単位があることになりません。

山内盛彬は、琉球音階はドミファソ、ソシドレと連結して進むと書き残しております。

世礼先生は、楽典の中に「田辺先生の説によれば普通の楽音は一秒時間に十音を最大とし、音は十分の一秒以上の継続が無ければ一個の音と認められない」と記しております。

それは次第下げ（次第上げ）の経過音には音階は現れないことを意味します。

世礼声楽譜は、これまで触ることを忌避してきた感があります。世礼声楽譜の誤りについて指摘し、楽譜の訂正を求めた動きはこれまでもありましたが、説明不足で仲間の理解を得ることが出来ませんでした。

琉球古典音楽の音階、旋法についてののしっかりした認識をもち、文化の継承を誤らない為には、研究所を開き弟子を育成しておられる仲間のみなさんの共通認識が不可欠と考え、このたび「琉球古典音楽・声楽譜の読み方」を上梓しました。「読をお勧めいたします。世礼声楽譜は未完です。未完成のままほっておいてはいけません。世礼声楽譜を補完して誤りのない野村流伝承の道を確認したいと思っています。皆さんのご理解を切望するものです。

私達を教えた先師方はご自分が師匠から習った通りの歌を唄って教えて下さいました。その意味において、受け継がれてきた先師の歌は今のところしっかり伝承されていると思います。伝承は時を経るにつれて薄れ、書かれたものに負けてしまいます。今の若者は学校での音楽教育も充実し、楽譜を読む力が付いてきています。近い将来において教える側も字ぶ側も声楽譜に頼るようになると思います。世礼声楽譜の責任は重いものがあります。